W
学位論文
2721
2

早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨
2721-2

博士（人間科学）学位論文　概要書

中国マルクス主義形成過程についての社会学的考察

（李大釗のマルクス主義を機軸として）

1999年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

木下　英司

李の根本にして究極のテーマは、真の民国の創設にある。そのために李はまず民国の現状分析を行い、そこから真の民国を作る術をもとめている。そして、李は民国混乱の原因を人災に求める。つまり袁世凱や都督と言った権力者が、民衆の自由の奪取し、圧迫を加えている点に原因を求めている。しかし、李はかれらのみにすべての責任を担わせようとはしない。例えば、民衆に対しても、単に犠牲者とのみ見るのではなく、かれらの能力の無さに責任の一端を求めている。李にとっては国家の責任は全員が負うべきであるとするのである。ここに国家と民衆との一体化という李の国家論の原形を見ることができる。

李は自殺から現状を打開するヒントを得る。つまり自殺を社会的現象と把らえ、ここに社会と民衆が連関することを発見する。しかし、李はこの連関を社会から民衆への一方的な連関・影響であり、民衆からのそれとはみていない。その後、李はトルストイなどの主張にヒントを得て、民衆の意識によって、社会が変革可能でないのかと直感する。だが、直感は直感にすぎない。社会と民衆が相互に連関し、民衆によって社会が変革できるという保証はどこにもない。証明しなくてはならない。李はこれを証明するために日本へと留学する。

李が日本の知の状況から析出したのは、近代の西欧思想や理論において、合理的な側面と非合理的な側面とが並存・両立しうるということ、そして非合理的な側面は、中国の伝統思想とも共通点を有するということであった。ここに李は思想における、合理／非合理、西欧（近代）／中国（伝統）の並存・両立を確信するに至る。

こうした確信の下に、李は社会と民衆について考察を始めている。李はまず社会が国家とは独立した存在であることを認め、さらに社会を民衆の「人心」により重層的に構成される心的集団であるとみなし、最終的には社会と民衆とを「一体化」させる。加えて李は民衆を完全な理性的な存在と見なすことによって、社会は理性的で、秩序だったものと断定する。ここにおいて李は民衆は完全に社会の中心者となり、社会の変革が可能であると主張する。ここで注意すべきは、李はこうした考察を通じて、「人心」を意識と無意識とのレベルで把握しているという点である。李にしたがえば、社会即民衆であるから、ここに社会は表層と深層のという二重のレベルで語られることになる。つまり、社会は李からすれば、意識／無意識、表層／深層という視点から分析可能となる訳である。ここに合理／非合理の並存可能性に基づいた李の視点を見ることができる。

こうして社会と民衆の関係を把握した李は、更に国家と民衆との関係を分析し始める。この際に李は国家を民衆の深層に存在する「理」が表層において反映された「理」と「法」として顕現する現象であるとみている。これは中国伝統思想に見られる「体用」の応用と考えられ、後の「一体二用説」の原形を見ることができる。そして李は結果として民衆－社会－国家を一体化させ、民衆による国家の可能性を主張するに至る。しかし、と同時に大きな問題が立ちはだかる。すなわち国家が民衆と一体化しているならば、何故に国家は民衆を圧迫するのか、と。李は社会と民衆の間に矛盾を認めていないから、この問いは国家がなぜ社会を圧迫するのかという問いにも変換できる。李はその問いに対して、国家の中に含まれている「法」が固定することで、「理」を圧迫し、それが民衆には圧迫として現れるとした。この解答は、国家と社会が分離しているということ、また国家が明らかに「疎外態」として現れていることを表明している。そして、李は国家が民衆から創出され

るのであるなら、「疎外態」としての国家は、民衆によって疎外前の状態へと戻すことが可能であると主張し、民衆を変革の主体に位置づけている。

だが疑問は解消されない。国家レベルでの「法」も「理」も民衆の「理」の中に含まれているのに、どうして「法」だけが固定化されるのか？また民衆－社会－国家が一体化するのであれば、社会現象とか社会集団が入り込む余地がないのではないのか？といった疑問が残っているからである。また革新の主体を民衆に置いたとしても、具体的な主体像や方法が明示されていないかった。

こうした疑問に対して李は、帰国後ベルグソンの時空論に依拠して答えている。李はベルグソンの「質的な時間」と「空間化された時間」を「宇宙精神」と現実世界に置き換える。ここから李は「一体二用説」をつくりあげる。ここに「体用」という中国古典思想とベルグソンの「生の哲学」が合体する。ここで言う「一体二用説」とは、深層に永遠に流れる「宇宙精神」の反映が表層の現実世界であり、そこではあらゆる現象は２つの相反する事象として現れるとするものである。ここに社会現象などが説明可能となる。それとともに、李は自らの主体像を提示している。李は主体とは、非実体的で相対化・疎外化された存在であるが、宇宙精神＝生のエネルギーと同一化することで、本来の絶対的な「主体」へと回帰することで、現実世界を変革可能にすることができるものであると定義している。

しかし、これだけでは「法」と「理」の固定化の疑問には答えられない。「均衡論」の発見を待たなくてはならない。李は「一体二用説」に基づいて、現実世界を新旧の事象が均衡しているとみなす。さらに李は第一次世界大戦の分析を通じて、新旧の事象は並存して進行するわけではなく、新旧が進行する際には、「ズレ」が生じる事を発見する。つまり、李は現実社会の現象は、新旧の事象の均衡→不均衡→均衡→均衡→･･･というプロセスを辿って行われるということを発見するのである。これを「均衡論」と呼ぼう。ここに先の問題は容易に解決されることになる。すなわち、深層に流れる「理」は、永遠に流れて停止することはない。国家はこの「理」の表層における反映である。ここに国家は「理」と「法」という相反する事象を含むことになる。しかし、「理」と「法」は、宇宙精神の「理」の進行とともに変化してゆく。しかし、この際に両者は平行して進行・変化するわけではない。両者の間にはズレ＝不均衡が生じる。その際に「法」は「理」に比べて固定化し、「理」とズレをおこす。これが結果として「法」の「理」への圧迫として現れるのである。李はこの「均衡論」を作り上げる過程を経て、世界が帝国主義段階へと向かっていることを認めている。そして李はボルシェビキに遭遇し、マルクス主義を知る。事実関係から見れば、李これ以降マルクス主義を受容することになる。ここに、マルクス主義は、「一体二用説」や「均衡論」と接ぎ木された形で受容されることになる。正確に言えば、李が受容したのは「唯物史観」であった。したがって、李のマルクス主義は、「一体二用説」と「均衡論」に「唯物史観」を接ぎ木した形で受容されることになる。

そのマルクス主義であるが、李は唯物史観における土台と上部構造の関係については、両者が相互作用するという解釈を施すことで、経済決定論的な俗流マルクス解釈からは逃れている。ただし、階級闘争についての理解においては、土台からの直接的な影響を回避させている。李にしたがえば、階級闘争とは経済的な要素によって最終的には決定されるが、直接的には「宇宙精神」つまり人間の深層に流れている「生」のエネルギーから発生する現象である。つまりこうである。唯物史観の法則にしたがえば、階級闘争は土台にお

ける生産力と生産関係の矛盾が上部構造に反映されたものが、階級闘争である。李は土台の階級闘争への影響を認める。ただし、それは最終的な結果なのである。すなわち経済的な要因は、あくまでも最終的で究極的な段階において、いわば「最終審級」として影響を及ぼすのである。階級闘争はこのように経済的要素と関わるものであるが、それは現実世界における現象として現れる限りにおいて、「宇宙精神」の直接的な反映なのである。こうした唯物史観についての解釈は、ギリギリのところで辻褄があっている。なぜなら、李の言うように、土台と上部構造は相互作用しているからである。

以上から李のマルクス主義が「一体二用説」、「均衡論」そして「唯物史観」の混合物であることが確認できるであろう。と同時に李は唯物史観を人間の能動性を発揮できる法則として把える。それは、次のような理解から可能となる。李の解釈にしたがうなら、上部構造は２つのものから影響を受けることになる。直接的には「宇宙精神」、最終的には経済的な要素である。ここから上部構造においては、「宇宙精神」＝生のエネルギーがより有力な決定因として見なされる。また上部構造と土台が相互作用する際には、上部構造の意識が影響力をもつわけであるが、この意識も上部構造に存在しているわけであるから、「宇宙精神」から生成されたものと見なすことができる。とするならば、土台と上部構造は、「宇宙精神」すなわち生のエネルギーによって直結されていることになり、ここに唯物史観を人間の能動性を発揮できる法則として把えることが可能となる。この事態は、結果として「宇宙精神」＝生のエネルギーが、唯物史観の主体であり、ひいては社会構成体の主役であることを意味するものである。李のこのマルクス主義を、私は「体用論的マルクス主義」と名づけたいと思う。

従来中国マルクス主義においては、「意識」を主としていると言われている。しかし、私に言わせれば、従来の研究では、なぜ「意識」が主体となったかについての説明が不十分である。それは、李のマルクス主義についての著作に眼を向けすぎたために、つまり李の思想形成をきちんと辿らなかったために生じた事態であると考えられる。すでに見たように、李のマルクス主義は、「一体二用説」と「均衡論」に「唯物史観」を接ぎ木した、いわば複合体である。この点を無視しては、中国マルクス主義における意識の在り方が説明できなくなる。

思わず批判じみたことを言ってしまったが、李はこのマルクス主義を駆使することで、国民革命と世界革命を説明し、さらに両者を結合させることに成功する。それは「世界同時革命」という主張へと直結する。

李はまず国内における階級闘争を否定する。なぜなら中国には資本主義的な生産様式が、簡単に言えば中国には階級闘争をおこすだけの経済要因がなかったからであり、いくら「宇宙精神」から階級闘争がおこるといっても、経済的要因がない限り、「宇宙精神」のみで階級闘争を説明はできない。なぜなら、唯物史観の法則に従う限り、経済的要因が「最終審級」として決定力をもつという前提においてのみ、「宇宙精神」は階級闘争を発生させることが可能だからである。したがって、李は国内においては、軍閥と民衆との間の「対立」が存在しているとのみ説明する。ただし、この「対立」は唯物史観の法則に即してきちんと説明できると李は確信してしていた。それは次のような説明から可能となる。

今中国は世界資本主義システムの中に佇んでいる。世界資本主義システムを土台とみなせば、中国はプロレタリアの地位に、列強はブルジョアジーの地位にいることになる。し

たがって、中国は列強に対して階級闘争が可能となる。これが「世界革命」である。しかし、ここで重要ななのは、中国は世界と連関していると言うことであり、ここに中国と列強の関係が、中国国内に持ち込まれていると言うことである。具体的に言えば、列強政府は軍閥と手を組むことによって中国を支配しようとしている。とするなら、中国国内における「対立」は、世界資本主義システムの中にあって初めて生じるものと言うことになる。したがって、中国国内において、資本主義的な生産様式はなくても、「最終審級」としての経済的要因は中国の国外に存在していることになり、ここに「宇宙精神」＝生のエネルギーによって階級闘争の発生は可能となり、同時に世界革命と国民革命が同時に可能となる。

ただ階級級闘争が、資本主義国家と比べて特殊な発生形態をするから「対立」と言ったまでなのである。階級闘争の特殊な発生形態とは、それは国内において、階級闘争を起こすだけの経済的基盤もなく、また労働者階級も資本家階級もいない、当然階級闘争も存在しない状況での、階級闘争の必然的発生を意味する。ここに唯物史観にまとわりついている諸々の概念、例えば生産力、労働者／資本家、階級闘争はこの世界資本主義システムの中に組み込まれることで発生したことで説明可能となる。また社会構成体の段階的な発展も、考える必要がなくなる。世界資本主義の発展の中で無理矢理おとしめられたものであるからである。これは同時に、張東孫の提示したところの「中国国内において、階級闘争を起こすだけの経済的基盤もなく、また労働者階級も資本家階級もいない、当然階級闘争も存在しない状況での、階級闘争の必然的発生」という難問に答えるものであると見なすことができる。

こうして「国内革命」と「世界革命」の同時革命を主張した李は、革命の主体を農民に求める。それは農民が帝国主義や軍閥に対して抵抗する力を有するからだけではない。李の求める「主体」像に近かったからである。すなわち、農民は世界資本システムによって圧迫され、本来の姿を奪い取られている。換言すれば世界資本システムの産児である。本来の姿を取り戻すためには、団結・組織して世界資本システムの手先である、帝国主義と軍閥に対して戦いを挑まなくてはならない。そして、勝利したときに、農民の本来の姿を取り戻せるのである。本当の「主体」となるのである。かくして、李は農民を革命の中核に置いた民衆の連合体を革命の主体として位置づけるに至る。

以上が李のマルクス主義形成過程である。ここで補足をしておくならば、この形成過程において、李は数々の中国近代思想－進化論、民主主義論、アナーキズムなど－と接点をもっている。とすれば、李のマルクス主義は中国における他の近代思想とのせめぎあいの中で形成されたと見ることができる。と同時に中国の伝統的な形而上学的な発想をも捨ててはいない。とすれば、同時に西欧思想と中国伝統思想とのせめぎあいの中で形成されたとみることができる。その意味からすれば、李が日本の知の状況から析出した思想における、合理／非合理、西欧（近代）／中国（伝統）の並存・両立という確信をそのまま持続かつ展開した形で自らのマルクス主義を形成したと結論づけられる。

こうした李の思想形成は、まさに中国近代そのものを体現しているように思われる。近代の端緒をどこに設定するかはどうでもいい問題である。ここで問題とすべきは、中国近代の意味である。中国近代は暗黒であった。それは「侵略」の２文字で代表されるであろう。したがって、中国が「近代」から「現代」へと移行するとき、それは暗黒からの脱出

＝栄光を意味している。先進国において、「近代」と「現在」との間にさしたる差異が見い出せないのとちょうど反対に、中国における「近代」と「現代」の差異は、天と地とのそれである。では中国が「近代」から「現代」へと移行するために、いかなる方法をとったであろうか。西欧列強からの脱出である。そのために中国は多くのものを西欧から輸入しなければならなかった。勿論、最初からそうしたことが行われたわけではないが、結果として、自前の技術や思想では西欧列強に対抗できないことを知った中国は、西欧から数々のものを輸入している。技術、制度、文化、思想などなど。結局、中国は「近代」を克服するために、西欧という「近代」を否定しなくてはならず、また同時に「近代」を受け入れなくてはならなかったのである。したがって、中国が「現代」へと移行を考える際には、中国にける西欧「近代」の否定と受容を、弁証的かつ同時的に考えなくてはならない。

こう見てくると、李の「体用論的マルクス主義」形成に至る過程は、まさに中国近代に他ならない。それは以下の理由による。李においては、その根本且つ最終目標は、真の民国を創設することにあったのであるが、そのためには軍閥とその背後存在する西欧列強を打倒する必要があった（＝「近代」の否定）。しかし、その方法を考察するためには、－西欧から直接ではなく、日本からではあったけれども－西欧の近代理論や思想を受容するしなくてはならなかった（＝「近代」の受容）。こう見てくると、李の思想的営為はまさに、近代中国の歩みと一致することが分かるであろう。そして、李のこうした歩み、すなわち中国近代の歩みを引き継ぎ、思想的にも、現実的にも、中国を「現代」に導いたものとして、毛沢東と毛沢東思想が挙げられるであろう。ここに、私は李と毛とが接点をもつと考えている。なぜなら、毛沢東思想は、李の「体用論的マルクス主義」を継承かつ体系化したものと考えられるからである。勿論、李から毛への接続を考えるのは、この両名の間に多くの人物やその思想を挿入しなくてはならない。

しかし、批判を甘受して言わせてもらえば、毛は李から多くのものを引き継いでいるのは確かである。例えば、毛が提示した重要概念である「矛盾」やその転化、「実践」および、その「主体」、さらに意識／無意識といった視点などなどは、李の「生のマルクス主義」の中に、形態は異なっているがすでに提示されている。ここでは触れないが、李と毛の間には相違があるものの、今見た限りにおいても、李と毛が連関していることが見て取れるであろう。それは同時の近代中国の歩みを示すものである。

したがって、以上の議論から、李の思想的営為は、中国近代の歩みを、思想において体現したものと結論づけたい。これが本稿の結論である。したがって、本稿はこれにて筆を置くことにしたいが、最後に一言。今李に与えた結論は、まだ研究途上である。というのは、ここまでの議論から、李の「生のマルクス主義」は、現在の中国マルクス主義の祖型と考えれると思うのだが、では中国「近代」から「現代」への移行、この移行はいかなるプロセスをとったのか、またそれがいかなる意味をもつのかが不明だからである。マルクス主義に限定して言わせてもらえば、李の「体用論的マルクス主義」は、これ以降いかなるプロセスを辿ったのかが課題となろうし、他の思想との関わりを視点に入れるとすれば、マルクス主義との関わりが、またそうした思想そのものが問われなくてはならない。またマルクス主義を含めた、こうした思想が「近代」や「現代」、あるいは「近代」から「現代」への移行といかに関わるかを見て行かなくてはならない。